

報告

第2回ジョイント連続セミナーの報告(平成30年度)

堀井直子¹⁾²⁾

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科、²⁾生命健康科学研究所保健看護領域部門

1. はじめに

生命健康科学研究所保健看護領域部門では、大学院生、教員、学部学生、地域の看護職、医療職などを対象に研究力の向上をめざして、昨年度よりジョイント連続セミナーを開催している。今年度のセミナーでは、研究とは何かを改めて問い直し、看護研究の本質について学ぶ機会とした。講師は、看護実践力を高める看護研究で著名な川嶋みどり氏(日本赤十字看護大学名誉教授)を招聘した。

看護系大学は2018年度現在、300校近くになり、博士課程も約100研究科が設立されている。しかし、看護研究は対象者が病んでいる人やその家族であることが多く、研究フィールドも治療の場で行われるなどの特徴から、エビデンスの創出や倫理的課題において進めていくことが困難な現状が見受けられる。そこで、今回のセミナーでは、看護の原点・研究の原点について講師からの問題提起と、どのように医療の現場で看護研究に取り組むことが可能なのか、自身の体験を語っていただき、看護の対象である人々や生活の営みの中から導き出される看護研究の本質について再認識できることを目的に企画した。

2. セミナー紹介

1) 開催概況

演題:「看護現場の疑問こそ真の看護研究の仮説への道」

日時:平成31年1月12日(土)14時~16時

場所:中部大学不言実行館アクティブホール

参加者:206名。内訳は教員39名、学生99名、一般参加者(本学臨地実習施設関係者、近隣の医療福祉施設職員)78名。

2) 講演内容(要約):

“研究の初心にかえる必要性”

学問の発展は無数の研究から成り、その成果の蓄積は、その領域の専門性を確立する基礎となる。看護学のような実践領域では、現実には起きている事象を深く観察し、実践途上での疑問を仮説にして実証的実践を重ね経験知を得て＜行為を可能にする原理—技術＞を導くことが可能になる。何故そうなるかを明かにするためには、＜研究＞という手続きに添った検証が必要である。しかし、研究の量が増えるに伴い、研究の1人歩き現象(研究のための研究)の印象も拭えない。改めて初心にかえることが必要である。



写真 川嶋みどり氏

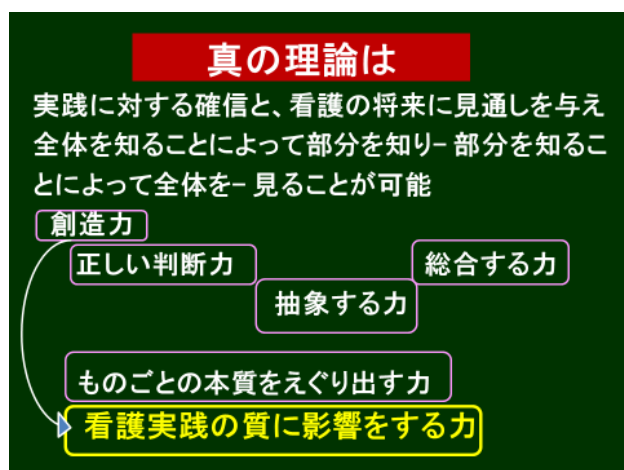
“看護の営みと価値づけ”

そこに人間がいる限り、何時の時代にも、何処の国にも看護行為は存在し、思いは通い合ってきた。いのちを維持・継続する日常的、習慣的ケアは暮らしの中で展開され、病人、高齢者、幼い人への愛と思いやりを基礎にして今もなお継続している。疾病構造の変化、医療技術の進歩、医療制度の変遷のもとでも、専門職の基本的理念は変わらない。看護の研究にあたいする価値を再確認し、ケアレベルの向上と専門職としてのアイデンティティをもって、全ての看護職者が自己の研鑽と研究の必要性を認識する必要がある。

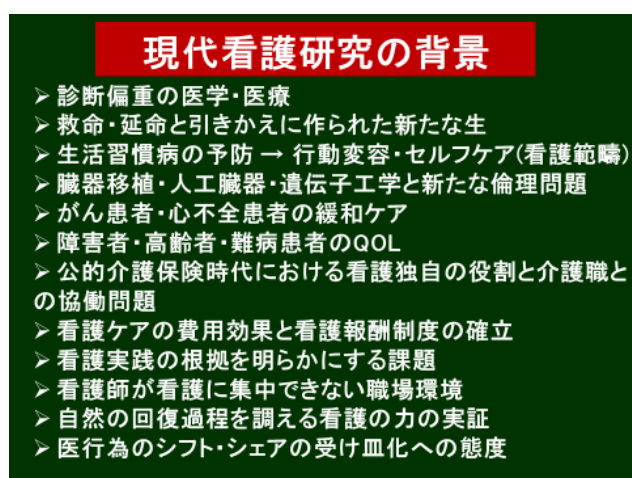
“今の私に通じる研究遍歴”

看護の道に足を踏み入れ 71 年である。対象の生活の諸行動ならびに健康上の諸問題が流動し変化する過程で、看護事象に潜む驚き、喜び、時に悲しみ、悔いに悩む体験を通して得た看護の底知れぬ深さへの魅力が研究継続の根拠となった。また、日常のベッドサイドで、外来の診療場面での無数の疑問への回答を求め、問題解決を図るプロセスで得た教訓、成果を、他の患者、場面での追試とも言える試行錯誤の実証から得られた成果が、手探り状態から研究への目を開かせてくれた。

真理は苦勞することで得られるのではなく、問うことによって得られる。一日一知の喜びは、一刻一知の喜びに通じ、やがて一分一知へと、どん欲なまでに知の探求が始まる。



講演スライド 1



講演スライド 2

“過去の知識を疑う”

例えば、清拭は末梢から中枢に向かって拭く、膀胱訓練のための尿管のクランプ、筋肉注射時の針の角度と

深さなどにエビデンスはあるのか、過去の知識(教科書の記載してあること)を疑い、検証していくことが重要である。

“経験知から科学的実証へ”

科学的理論では説明のつかないことに対して、本質的で創造的なヒントをもたらすものが「経験」である。臨床における技術研究の仮説になり得る。たとえ 1 回限りの印象的な事例であっても記憶の引き出しに保存され記録しておけば、次の経験との同質性に気づき、実践・研究上の有用な仮説になる。不眠患者への足浴の有効性や便秘患者への腰背部温罨法、認知レベル低下者への背面開放座位などは、エビデンスが検証され博士論文となっている。

“仮説とは”

2 つ以上の事実のあいだの必然関係を導く前段階としての高次の概念で、科学(研究)の核心となる重要な要素である。法則の主観的反映を命題の形であらわし、実証されぬまま「～は～である」と言い切る。発想契機はユニークでも、実証過程は冷酷で厳密なものである。借り物ではなく自分の独創に基づくものでありたい。

“一事例を大切にす思想”

事例検討は、日本のナースステーション文化である。成功例、失敗例、問題事例、悔いを残した事例を問わず、その経験を共有、分析して蓄積する過程で、よりよい看護実践の仮説が生まれ、研究に通じる仮説となり得る。

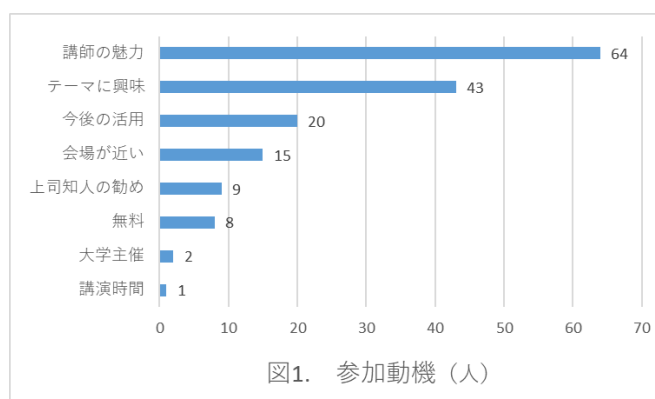
1 例の重み(全体としての看護事象-対象、実践内容と結果等)をまるごととらえ、多くの変数をさまざまな角度から分析しつつ、より深みを持った研究へとすすめる。そして、どのような母集団に共通な 1 例かを明かにし、得られた法則性を仮説にする。

“まとめ”

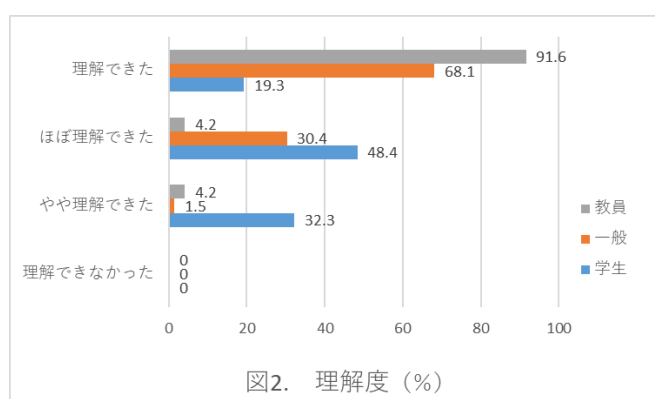
他人の発想に依存したり、過去文献に引きずられたり、情報過多、知識過剰になりかねない環境のもとで、自己の独創、主体的実践によるオリジナルな仮説の発想は「楽しい」の 1 語に尽きる。感性を磨き古びさせず、何ごとにも前向きに向き合い、クリティカルシンキングをよりどころにして、自分の研究に取り組んでみよう。

3. 参加者の反応

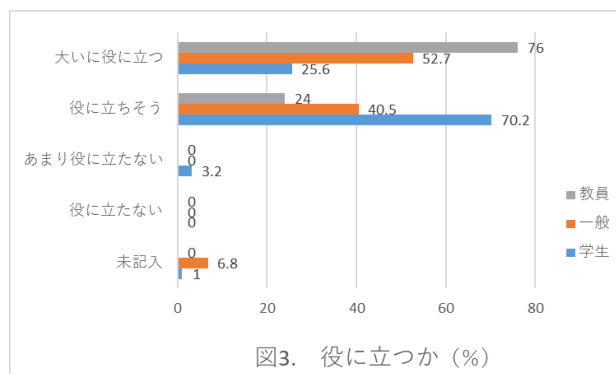
セミナー終了後、任意で無記名のアンケート調査を実施した。全体の回収率は93.7%であった。学外からの一般参加者74名のセミナー参加動機(複数回答)を図1に示す。9割近くの参加者が講師の魅力を、6割の参加者がテーマをあげていた。講師の選定やテーマの設定は、特に学外の参加者を募るうえで重要である。



講演内容の理解度を、教員、学生、一般参加者で比較したものが図2である。教員や一般参加者は「理解できた」と答えた人が最も多いが、学生は5割が「ほぼ理解できた」、3割が「やや理解できた」であり、「理解できた」と答えた学生は2割であった。今回のセミナーに参加した学生は、卒業研究に取り組み始めた3年生であった。まだ、臨地実習の体験も少なく、研究も文献検討の段階であり、現場の疑問などを題材にして話された看護研究の原点は学生にとって平易ではなかったようである。



研修内容は今後役に立ちそうかについて、教員、学生、一般参加者で比較したものが図3である。教員では、「大いに役立つ」と答えた人が76%、「役に立ちそう」が24%であった。一般参加者では、「大いに役立つ」が53%、「役に立ちそう」が40%であった。学生では「大いに役立つ」が26%、「役に立ちそう」が70%であった。教



教員と一般、および学生間では今後の活用の認識に差は出たが、何らかの学びをもちかえってもらえたと思われる。

アンケートの自由記載では、「日常ケアに満足せず、常に“何故?”という問題意識をもって取り組んでいると、新たな発想やケアに繋がるのだとわかりました」「漫然と看護をしているのではなく、日々の事例検討のカンファレンスの習慣を作っていきたいと思いました」「学生に研究を指導するうえでとても参考になりました」「自分の感性を信じて研究に取り組もうという気持ちになりました」「看護師として働いていた時の現場の楽しさを思い出し、研究をしたい!という動機が高められました」などがあつた。本セミナーが看護研究に取り組む意識を高めることに繋がったと思われる。

4. おわりに

川嶋みどり氏は、看護実践の質を高める研究において多くの業績をお持ちである。どれもが看護の現場から生まれた、看護界の宝となるエビデンスである。氏は一つ一つの看護現場の現象を大切にし、感性を研ぎ澄ませて疑問を持ち、思い切った仮説を立てて検証していくことの重要性を、自らの看護師、研究者、教育者としての人生から語られた。氏は、結婚、子育て、介護と併行しながらも僅かな時間も惜しんで研究に取り組んできた体験を話されたが、その姿勢に畏敬の念を抱かずにはいらなかった。

近年の医療現場では、高度化・機械化が進み、正確なデータに基づく診断、治療が可能になった。その反面、「会話をする」「手を触れる」などが疎かにされ、患者サービスの低下を招いている現状がある。長きにわたり医療現場に関わってきた氏は、患者の自然治癒力を引き出

す看護ケア「TE-ARTE」(テアーテ)という言葉を生み出し、世界に広めようとされている。「TE-ARTE」とは、手を触れるということだけでなく、心を通わせながら寄り添うことである。どんなに AI が進んでも人の考え方をコントロールされることはなく、最もオートメーション化されない領域が看護である。現在、氏は、一般社団法人「日本で・あーて、TE・ARTE、推進協会」の代表理事でもある。また医療界で活躍されている後期高齢者に授与される山上の光賞の第一回の受賞者でもある。氏のバイタリティ溢れる講演を拝聴し、これからもますます看護界をけん引され続けることを確信した。

年明けの忙しい時期にもかかわらず、多くの人たちにご参加いただき、手ごたえのある成果を得ることができました。ご参加いただきました皆様、ありがとうございました。また、運営に際しご尽力を賜りました、コモンズセンター、メディア教育センター、学園広報センターおよび看護実習センター関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

【講師紹介】

川嶋みどり氏

略歴:1951 年日本赤十字女子専門学校(現日本赤十字看護大学)卒業。日本赤十字社中央病院、日本赤十字女子専門学校、日本赤十字女子短期大学、日本赤十字看護大学にて勤務。その後、基礎教育、卒後研修等の講師、研究、執筆活動などを継続。現在、健和会臨床看護学研究所所長、日本赤十字看護大学名誉教授。一般社団法人日本で・あーて、TE・ARTE、推進協会代表。日本看護実践事例集積センター(web)代表。

受賞:1995 年第4回若月賞受賞、2007 年第 41 回ナイケンゲール記章受章、2015 年第1回山上の光賞受賞。

著書:看護の力(岩波新書)、キラリ看護(医学書院)など多数。最近の著書では、いのちをつなぐー移りし刻を生きた人とともに(看護の科学社、2018)、ヘンダーソンの贈りもの(看護の科学社、2018)。

【企画・運営】

2018 年度生命健康科学研究所の助成金を受けて実施した。

[企画委員]

堀井直子, 三上れつ, 久米和興, 城憲秀, 白石知子, 渋谷菜穂子, 牧野典子, 山田知子

[運営委員]

小塩泰代, 嶋崎和代, 早瀬 良, 夏目美紀子, 大谷かがり, 寺本由美子, 木村裕美子, 伊神美早